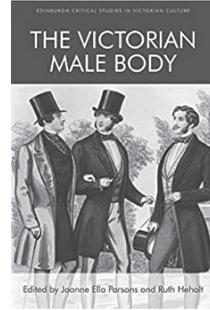


書 評

The Victorian Male Body Edited by Joanne
Ella Parsons and Ruth Heholt
(Edinburgh: Edinburgh University Press, 2018)



畑田 美緒

The Victorian Male Body は19世紀の文学とその他の表象における身体、特に白人男性の身体の重要性を前景化し、「中流階級の白人男性の身体」というイデオロギー構造に内在する矛盾を明らかにしようとしたものである。1980年代以降、フェミニズム研究やポストコロニアル研究で、それ以前には不可視であった「男性らしさ」が注目されるようになり、その流れを汲んだ本書に収録された11の論文は、それぞれが多岐に及ぶテキストを扱い、中流階級白人男性の身体は、実際には植民地的ディスコースが掲げるような、統一され完璧なメタファーとしての機能を担うことは不可能であったことを示している。また、その理想像も時代とともに移ろい、実のところ完全な男性の身体という概念さえも存在せず、むしろ多様性と柔軟性があったという点に注目し、19世紀における「男性らしさ」の問題を脱構築・再構築することを試みた意欲的な論文集である。

第1章の Alice Crossley による“Violent Play and Regular Discipline: The Abuses of the Schoolboy Body in Victorian Fiction”では、19世紀半ばに伝統的な肉体的攻撃性重視のものから「道徳的」男性らしさへと価値観が変容しつつあった中で、その両方を扱う学校に注目し、具体例として David Copperfield が経験する体罰、Thackeray 作品での通過儀礼としての管打ち、いじめ・喧嘩・拳闘を通しての連帯感と敬意の育成、Tom Brown の学校での同性愛的結びつきと男性らしさの獲得、などを詳細に分析している。そして、少年の男性としての identity を形成し、家父長的・男性的価値観と伝統を維持する教育を行う一方で、その身体の脆弱さや女性的要素を露呈させる側面も備え、象徴的一貫性を欠く少年期の男らしさの舞台となる

学校が、「身体」の問題に読者の注目を集める上で果たす役割について論じている。

次の“Punishing the Unregulated Manly Body and Emotions in Early Victorian England”でJoanne Begiatoは、男性らしさが身体と感情の自制に基づくと考え、食欲と感情の制御失敗という観点から論を進める。まず「男性らしさ」の反対は「女性性」だけでなく、種々の肉体的感情的欠陥をも意味することを指摘し、肉体や感情の制御不能は狂気に至ることに注目する。この論文のユニークな点は、実際の精神病院の症例集を取り上げ、飲酒過多や不道徳な生活習慣などの自制の欠乏と狂気の関連性を示した上で、強い男性こそ不摂生を犯しがちであり、病院での自己抑制の学習が女性性の助長に繋がる、という興味深い矛盾にも言及していることである。不摂生な男性への罰は、社会的評判の失墜にとどまらず、身体的・感情的・知的統合の喪失という厳しいものであるという結論は説得力がある。

第3章でTara MacDonaldは“The New Man’s Body in M^énie Muriel Dowie’s *Gallia*”の冒頭で、優れた肉体の持ち主Eugen Sandowの成功は、19世紀末の国家の衰退と男性の柔弱さへの不安の解決策となっていたことを指摘する。その上で、Galliaが「新しい女性」が社会に影響を与える方法として母性を強調するという特異性に焦点を当て、これを分析する。優生学を重視する主人公は純粋な社会を目指して生殖能力重視の結婚をするものの、知的・肉体的理想を統合した「新しい男性」ではなく「新しい父親」が出現する、という結果に至る。GalliaとSandowの思想の類似は、New Womanと初期の優生学との結びつきを示唆するもので、この理解がNew Woman/Manの社会的文化的意義を深めることを指摘し、「新しい女性」の勝利により、男性は肉体の見本と国家の象徴へと変貌してしまう、と締めくくっている。

次の“Pirates and Prosthetics: Manly Messages for Managing Limb Loss in Victorian and Edwardian Adventure Narratives”でRyan Sweetはまず、海賊と人工補装具の結びつきは19世紀後半にはさほど顕著ではなく、『宝島』の海賊も実は義足ではなく松葉杖であることを指摘する。さらに、種々の小説内の木製義足の海賊や有能に働く障害者などの具体例を示し、肉体損傷が暴力的気質の視覚的記号表現かつ理由となったり、精神喪失に結びつ

けられたりする一方、「男性らしさ」を示す魅力的な人物にも時に付与される点に注目する。そして、人工補装具に加え、順応性・勇気・決断力も兼ね備えた人物を描く海賊物語が超男性性 (hyper masculinity) の理想の象徴となった、つまり、障害に立ち向かう海賊の態度と、手足の喪失を補う補装具が総合され、不朽のステレオタイプが生み出された、と結論づけている。

次章では Meredith Miller が“Tuberculosis and Visionary Sensibility: The Consumptive Body as Masculine Dissent in George Eliot and Henry James”で、社会的国家的崩壊をもたらし、ジェンダー的に不適切な男性の身体と病・幻想的感性との関わりについて論じる。まず、Keatsの霊的ヴィジョンと病気の身体や同性同士の絆は、帝国主義国家を支える「男性らしさ」の対照物であり、肺病の男性登場人物は国家と理性からの逸脱であったことを指摘する。そして *Daniel Deronda* では肺病が、国家・人種・男性の identity 批判に利用されていること、*The Portrait of a Lady* の Ralph は作者自身の投影でもあり、男性的な国家への疑問を示す人物でもあることなどから、肺病の人物は美的感性や消極的能力と反体制的男性の身体で帝国主義的・独善主義的なイギリスの男性性への批判を示す存在で、そのゴシック的要素は、力強く活動的な男性らしさの概念を攪乱するものであったことを明確に導き出している。

Alison Younger の “Monstrous Masculinities from the Macaroni to Mr Hyde: Reading the Gothic ‘Gentleman’” は、ファッションへの注目から始まり、19世紀初期、「男性らしさ」は地位、富、家系で決定され、飾り立てず上品な服装が是とされる中、DandyやMacaroniはイギリス「紳士」への侮辱であったことに言及している。さらに、両性的国家の価値観の表象である紳士の身体の問題と、世紀末ゴシック文学における怪物と性的逸脱に注目し、Mr. Hyde、Dracula、Dorian Grayなどの分析を通じて、Dandyの不自然な外見やMacaroniのグロテスクな男性性は、男性のアンチテーゼであるのみならず分類不可能な怪物、贅沢や女性化の権化であり、ゴシックはMacaroniやDandyと同様、死・退廃・性別・地位・国家をめぐる不安を導き、イギリス紳士の概念を危険にさらすものである、と締めくくっている。

第7章では Ruth Heholt が “Visible yet Immaterial: The Phantom and the Male Body in Ghost Stories by Three Victorian Women Writers” で、白人男性に見える幽霊と、幽霊としての男性の問題を扱っている。ヴィクトリア朝の前期、中期、後期をそれぞれ代表させて Catherine Crowe、Rhoda Broughton、Edith Nesbit の幽霊物語を取り上げ、そこに登場する、幽霊を見る男性の女性化、「健全な肉体と精神」の原則のアンチテーゼとなる無力な男性幽霊、活発で断固たる男性幽霊などの諸相を分析することで、幽霊物語はジェンダーに関する慣例が乱される場であり、ヴィクトリア朝の覇権的「男性性」の不確実性を示唆するものであることを主張する。時代と共に変遷する幽霊像は、当時のジェンダー規範の崩壊をもたらす一方で、スピリチュアルなものを受容できる新たな男性性の可能性を示唆している、という指摘は興味深い。

Françoise Baillet は “Aesthetics of Deviance: George du Maurier’s Representations of the Artist’s Body for Punch as Discourse of Manliness, 1870-1880” で、*Punch* 誌の人物画の「タイプ」が複雑化する社会に秩序を取り戻す役割を果たしていたことに着目し、男性の肉体を社会のメタファーと捉えていた du Maurier による前衛芸術家を題材にした人物画を取り上げて論じている。19世紀の前衛芸術家は社会的病の兆候、男性性の議論を引き起こす存在であったことから、その不健全で衰退を表す肉体に内在する性的逸脱や道徳的腐敗を描き出すことで、逸脱と立派さ、危険と安全、自己と他者の線引きをし、視覚的に差異を示すことができた指摘する。前衛芸術家を「他者」としてからかうことで、読者である中流階級の identity を強固なものとするばかりでなく、欠陥のある男性の身体を描き擲揄することで、版画家が規範的男性らしさを持つことも主張できたと結論づけている。

第9章の “Suffering, Asceticism and the Starving Male Body in *Mary Barton*” で Charlotte Boyce は、中流階級の男性の自制と対極にある労働者階級の男性の食欲に注目して *Mary Barton* を論じている。一般的には、労働者階級の恐ろしい食欲は中流の読者にとって「他者性」を強調するが、小説前半で John Barton が示す自己犠牲的な食欲の抑制や利他主義は、中流階級の「男性らしさ」に通じるところがあり、後半における暴力や殺人

の後の断食は、女性による拒食症的自己破壊と共通点があると分析する。そして、男性らしい禁欲と女性らしいいたわり、禁欲的忍耐と暴力的反乱のずれが生じる場としてのBartonの存在は、ヴィクトリア朝の階級・ジェンダーの境界を破壊し、そこに潜む緊張と流動性を示すことを明快に論証している。

次のJoanne Ella Parsonsの“Fosco’s Fat: Transgressive Consumption and Bodily Control in Wilkie Collins’ *The Woman in White*”でも、食物と身体が焦点となっており、意志薄弱や過食が原因の肥満とは異なるFoscoの身体とジェンダー・権力との関連を考察している。彼の食事制限の失敗は、異国風で派手な服装と共に彼の非道徳性を暗示し、また、怠惰／陽気の両面を備えたこの肥満男性が、甘い物を嗜好し貪欲に食べ物を貪る様子は、他の行動にも垣間見られる彼の性的逸脱と女性性を暗示することがまず指摘される。そして、一般的な男性らしさの規範を拒否し続けるFrescoは、男性支配の餌食となって罰せられ、その身体は死体置場という劇場で、死による肉体の分解が進んで変形が不可能になるまで説明や解釈を拒み続けているのだ、という結論に至っている。

最終章では“Sensationalising Otherness: The Italian Male Body in Mary Elizabeth Braddon’s ‘Olivia’ and ‘Garibaldi’”の中で、Anne-Marie Bellerがヴィクトリア朝の言説は権力・ヒエラルキーの差・原始主義などに基づくものが多く、「他者」の概念導入が有効であるとの立場から、不安なイギリスの「男性らしさ」の構造を考えるためにイタリア人男性を導入して論を展開する。特に、Braddonの“Olivia”と“Garibaldi”を取り上げ、内容形式ともに伝統的な英雄男性を描く前者、イタリアへのステレオタイプの考えを流用／破壊し、男女、伊英、理性と情熱、健康と病などの対立を脱構築する後者、2作を並べて鑑賞・分析することの意義を主張している。各々が政治的身体と肉体的身体を扱う両詩は、イタリア人の身体が男性らしさと国籍の問題を混乱させるという点で、「異国の身体」が健全な国家のidentityの構築に果たす役割の分析に適したテキストであることに言及し、その作者であるBraddonは「反イギリスとしてのイタリア」という二項対立を打ち破ることのできる女性作家である、と評価している。

以上11作の論文は、Constructed Bodies (第1章～第3章)、Fractured and

Fragmented Bodies (第4章～第7章)、Unruly Bodies (第8章～第11章)の3つのパートに分けられ、これまで見過ごされがちであった「中流階級の白人男性の身体」のイデオロギー構造に潜む矛盾を炙り出し、全体としてその主張を力強く打ち出していると同時に、各々が扱う題材の多様性や切り口の斬新さは、この枠組み内には収まりきらないような無限の発展性を秘めている。これからこの分野の研究に足を踏み入れようとする者に有意義な手がかりを与えてくれることはいまでもなく、すでにこの領域に造詣が深い読者にとっても、さらなる可能性を示唆し思考の飛躍を促してくれる一冊である。

—大阪大学教授